
おれが魔族の嫁に！？

aslvent

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれが魔族の嫁に！？

【Nコード】

N0814P

【作者名】

aslvnt

【あらすじ】

ある日、重傷を負った魔法使いの涼は魔族の男に命を救われ、魔界に連れて行かれてしまう、そこで「この人質の人間どもを助けたければ嫁になれ」と脅迫され、抵抗するも……。

「おれはおとこだ！」「そんなことは関係ない！」

まさかの新婚生活の始まりである。

登場人物紹介とか（前書き）

ネタバレ含みますので、プロローグに進むことをお勧めします。
いや、むしろ見ていくし！という方はどうぞご覧ください。

登場人物紹介とか

【登場人物】

く如月涼く

本作の主人公。身長165cmと小柄でクリっとした目が特徴だが、細く端正な顔立ちに意外としっかりとした肩幅のため、初見でもなんとか男として認識されている。

能力：『白銀の舞姫』

能力を使うには、全身白を基調とした巫女服に、蒼のラインをいくつか入れた衣装に変身する必要がある。

同時に性別が女の子になり、身長150cmの子供っぽいかわいらしい顔つきに少女になってしまう。

巫女服にはたいていの攻撃は反射・吸収する機能付き。

物を具現化させて特殊な能力を付与する能力を持ち、剣などを創り出している近接戦闘などを主としている。

くバストマ・クレルく

涼を連れてきて自らの嫁になるように言った横暴な男。魔界のラデイスオン国青禁軍^{せいらんぐん}將軍の地位に就いている。190cmはあろうかという長身に切れ長の紫色の瞳、短い赤髪を軽く遊ばせ、西洋の世界から抜け出してきたような印象を持つ。

能力：薄紫色のオーロラ状の魔法を扱う。

涼の行動を制限している腕輪もクレルの魔法。

登場人物紹介とか（後書き）

人物・能力・機能など新しく出てきたら随時更新していきます。

プロローグ（前書き）

初投稿の作品ですのでどうか温かい目で見守ってやってください。

プロローグ

「人間界を滅ぼせ」

その一言であつた。

魔界と呼ばれるこの人間界とは違う世界の一国の王が、ある日突然にそう言った。

それだけで私たちの平和な人間界は、毎日が死と隣り合わせの生を生きる事になった。

その宣言がなされた2時間後、地球の各地に高さ500mはある生物のような黒く、禍々しい巨塔が累計20本出現。

その塔より夥しい数の魔族・魔物があふれ出てきて、あつという間に世界を蹂躪し始めた。

この人間界は魔法や魔法使いといったものは存在はするものの、その存在は一般的には認知されておらず、魔法や魔界、魔族といった情報を全く持たない大半の世界の人々は、なにが起きたのか理解できず、ただ殺戮されていった。

実際は某アメ 力軍とか、某ヨーロッパの方々が軍隊を出撃させて、撃退することもあったが、空母や艦隊には魔法に対する防御がなく、一撃食らえばアウトという苦戦を強いられていたため、戦況は芳しくなかった。

そんな戦いが10日続き、世界の人口が2割（約13億人）減り、某アメ 力のリーダーが「カクウチマゝス」と言い放ち、明日にでも核兵器が投入されるかという時に魔法使いたちは現れた。

第1話「魔族と魔法使いと自分」（前書き）

せっかく書いた文章が保存前に消滅しました。
とっても泣きそうになって立ち直るのに時間かかりました。

第1話「魔族と魔法使いと自分」

「本日、日本時間6時50分にノルウェー海に存在していた魔族の塔を魔法使いと連合艦隊が破壊したとの情報が入りました。この戦いに参加した魔法使いは……」

今は朝の7時半、俺・母・父（姉もいるが早々に家を出ている、大学が遠いらしい）で朝食を食べていると、リーンリーンだかポーンポーンだか高い音が鳴り、臨時ニュースというのが流れ始めた。

大塚さんが消えてしまった、まだ小倉さんに代わるのは早いというのに。

そんなことより、そのニュースを見ていた両親は驚いて感心したようだったが、すぐに朝ご飯に戻る、あまり興味が無さげである。

確かノルウェー海ってイギリスの上のほうだったけ？

日本からは遠いけどさ、魔族の拠点の一つが潰れたんだから喜ばうよ、俺の親！

けど俺も人のことは言えないんだけどね、あまり関係ないし、日本は遠いから。

とか考えるあたりはさすが日本人って感じだね、自分に関係なければ我関せずの精神です。

そのあとは大塚さんが戻ってくることはなく、臨時ニュースが流れ

続けているうちに登校時間になり家を出た。

「いつてきまゝす」

ここで現状確認、世界やばいんじゃない？

という状態でなぜこんなのんびりとしているの？

とか・・・。

お前誰？

とか・・・。

疑問があると思うので順に説明させていただこう。

まず世界に現れた黒いキモイ塔は魔族の拠点であり、そこからうようよと魔族や魔物が出てくる。

魔族とは見た目は全く人間と同じなのだが保有する魔力量やら、身体構造なんか人間とは違うが、ぱつと見は見分けがつかない。魔物を従える力を持っていて、人間を滅ぼそうとする。

そして、魔物とは魔族が使役している動物みたいなやつら、でかいのから小さいの、キモイのからお持ち帰り、したいのまでさまざまである。

ちなみに人間界に侵攻してきたのは主にこの魔物たちで、魔族が操っている。

こいつらは、塔から湧き出てきたら周囲を完全征服する作戦で来た。侵攻するのは塔の周囲の半径約1500km（まあだいたい日本の北から南までが3000kmといえわかりやすいかな？）を、現存する人間や動物を皆殺しにしているのだ。

だけど魔族どもはなんも考えずに塔を召喚らしく大半が海の上に出現したのだ、学校で習ったよね？地球は7：3で海が多いのだよ。つまり塔の半分以上は海の上で、空を飛べる魔物は少ないらしくあまり思ったようには侵攻できてはいないのだ。馬鹿だね。

それでもかなりの量の魔物が海の塔から来るけどね。海の場合はかなり広範囲に侵攻している、だから塔なんてないよ。って場所でも海岸に近いと魔物が上陸してきたりするのだ。ちなみに日本にも何回か来たよ、少なかったけど。

で、日本の周りには塔はないので比較的安心というわけだ、塔が現れた大陸や国は悲惨らしい・・・。

特にアメカは西海岸のLAという場所が廃墟になったり、ほかにも大都市の近郊に現れた塔による被害でかなりの人が死んでしまったというわけだ。

しかし、魔法使いたちが現れてから1ヶ月戦線は均衡状態にまで持ち直していたりするのだ。

そして、お待ちかね、俺の自己紹介といこうか。えっ？まってない？関係ありません、聞いて損はないよ。

おれの名前は如月涼（きつき りょう）、高校3年生の今年で受験生だ、しかしある理由によって留年（りゅうねん）っているので年齢はまだ19歳。その理由というのが魔法使い特殊訓練を行っていたからに他ならな

い。略して魔特訓。・・・微妙。

つまり、俺は魔法使いなのである。

ここでこの世界での魔法使いに立ち位置を説明してあげよう。今日は親切さ、大盤振る舞いだな俺。

まず、この世界の人たちは魔法なんてものは知らないし、大抵の人は魔力すら持っていない。稀に10万人に1人くらいの確率で魔力持ちの人間が生まれてくる、その人間を魔法使いの組織であるウィザード社がスカウトするわけだ。（名前隠す気ゼロなのにはれないのはなんか裏工作やっているらしい、魔法なんて反則技も使えるしね）

スカウトと言っても日常生活において普通の人として暮らせるように講習を受けたり、魔法の使い方や制御方法を教えたりしているの、魔法が使えない人とあまり変わらない生活が送れるわけだ。

その中でも魔法を使いこなしたいとか、役に立ちたいって人、または保有する魔力量が大きい人は、ある仕事を日常生活の合間に行っている。

それは魔物退治！

黒い塔が現れる前も空間の亀裂や、人が多く死んで場が不安定になった場所なんかで、たまに魔物が現れていたので、その退治や封印を行っているのだ。

俺は魔法量が多いらしくウィザード社の人に「魔物退治やってみない？」と聞かれたのが13歳、その時からちよくちよく手伝っていて、16歳のときに本格的に魔法を極めたくなったので両親には海外留学と言つて（ちなみに嘘ではない、ウィザード社は世界中に支社を持っているが本社はヨーロッパにあるのです）2年間頑張った、元の素質もあつて世界でも10指に入る使い手になってしまっ

た。

俺の能力？

あまり教えたくないけど・・・、ここまで来たら教えますよ！

能力名はDancing girl of silvery white

日本語にすると「白銀はくぎんの舞姫まいひめ」だったかな。

ウィザード社の本社で魔法使い特殊訓練（魔特訓はなんかヤダ）をしていたときに、俺の戦い方を見たお偉い方が勝手に名付けやがった！

偉い人にドヤ顔で、「どうだいいだろ」と言われたら、おkとしか言えません、「まあ別にいいか」とも思ったしね。

けど日本語にするとこんな厨二表現になるとは思わず、あの時の俺を恨んだ、よく考えて返事をしなさい！

これでは、日本のどっかの馬鹿親みたいに子供に対して「悪魔」ちゃんと名づけるようなものだ、けどこの子供って確か結局は周囲の反対で改名してたっけ。
逸れました・・・。

能力は某月の戦士よろしく変身します、全身白い巫女装束で青っぱいラインが入ったものを身につけ、
・・・女になります。

いや、なりたくてなるわけじゃないからね！
そこ勘違いしないでもらいたい！

魔法に詳しいウィザード社のばあさんに聞いたら、俺の魔力の色っていうか種類？みたいなものが女の状態じゃないと使えないらしい、

確かに男のときは全く使えないけどね、魔法。

けどあんまりだと思って、「二度と魔法使わねえし!!」と誓っていたんだけど、当時中学生の俺を言葉巧みに勧誘してきたお姉さんがいて、ふらふらつと一回だけならとOKしたら、いつの間にか世界最強クラスです。

どこで道を間違えたんだ？

技はなんか武器創って戦う感じ、近接戦闘とかだね、見た目は。これはそのうちわかる・・・、今わかると思うよ。

ブーブーブブ、ブーブーブブ・・・

のんびりと家から駅に向かって歩いていると、涼のポケットに入っている携帯が鳴り始めた。

この鳴り方の設定をしたのはウィザード社からのみだから、ということは・・・。

ポケットで鳴っているauの最新機種を取りだして着信相手を確認、予想通りの相手だな〜とか考えながら通話ボタンを押す。

「はい、こちら涼です。」

「あ、涼ちゃん海から魔物の反応が迫ってきているから撃退お願いできる?」

電話口に出たのは明るく快活な話し方をする女性、美鈴さんだ。

ウィザード社の日本支部の人で、中学の時に俺を洗脳・・・勧誘した人でもある。

「美鈴^{みれい}さん、ちゃん付けはやめてください」

「いいじゃない、女の子なんだし」

「いまは男です！それより、魔物って日本に来たんですか？」

俺は彼女の間違いを訂正しつつ、本題に入る。

「そうよ、どうやらまたハワイの塔からこっちに来ているらしいの、探知魔法を使う子が言うにはあと10分くらいで千葉県到着だって、お願いね」

プープープープー

言いたいことだけ言って切りやがった、昔からなんか強引なところがあるんだよね、この人。

俺はぶつぶつ言いながら人気のないところを探した。

なぜって？

変身するのに見られたらまずいじゃん！

魔法は秘密だし。

俺は人気のない場所を見つけて変身する。

変身シーンは割愛します。妄想してあげてください。

短髪の黒髪から肩まで垂れる白銀の白髪に変わり。

身長150cmの幼さの残る少女といった姿になる。

そして、一息で飛び上がり普通の人では目視できない高さまで上がると、目的地に向けて全力で飛行を開始した。

「あ、今日学校サボりじゃん」

涼は飛び続けた。

これから自分の運命を大きく変えとも知らずに。

第1話「魔族と魔法使いと自分」（後書き）

文章書くの難しいです、今まで本は読んできましたが書くためには読んでいなかったため、その辺りを考えながら読んでいます。

なので、表現が他の作家さんと似てしまいかもしれませんが許してください。

限界です、いっぱいいっぱいなんです。

字を打つのも遅いのでのんびり更新ですが少しずつ進めていきたいと思っていますので、気長にお待ちいただけると幸いです。

第2話「コーヒーを飲みながら・・・」（前書き）

前話でちよつといろいろと修正しました。

勢いとノリで書いていたらおかしいところが出てきてしまったので
す。

はい、すいません。もっと設定をしつかりと決めますです、・・・
はい。

第2話「コーヒーを飲みながら・・・」

「はあゝあゝあゝ」

涼はため息をつきながら眼下を高速で流れていく景色を背景に、自分の胸元を見下ろした。

そこには慎ましくも確かに存在する2つの膨らみがある。

サイズはBに近いくらいだろう。

涼は両手で自分の胸を掴み、フニユフニユと揉みながらも思案顔でいる。

「なんで、俺だけこんな異常体質なんだろう・・・」

その独り言に返事をする者など誰もいない。

いや、いたらおかしいのだが・・・。

いまだフニユフニユと手を動かしながら、今まで何度となく呟いていたことを呟く。

涼は飛行中は比較的このような状態になるのだ。

「男の状態でも魔法が使えたらな」

この体質を知って魔法を頑張ろうと決めた時は・・・。

なんで女だし！

と。

最初は落ち込んだし。

少し慣れたら興味もあったからテンションが上がったりもした。

けど最後は虚しいな。

身にならない思考を繰り返しながら飛行すること約2分。

目的地の千葉県から東に進んだ沖の海上。

海上自衛隊の軍艦が見えてきた。

人間と協力することになってから、魔法使いは各国の軍隊と共闘している。

涼はその上空に待機して敵がくるのを待つ。

「あっつ！」

今だに両手ではないものの、片手で自分の胸を触っているのに気がつき。

誰が見ているでもないのに、慌てて離れた。

涼も中身は思春期の男の子である。

女の身体・・・。

たとえそれが自分のあったとしても、つい触ってしまうのは悲しい男の性であった。

ちなみに誰も見てはいなかったのだが（むしろ高度が高すぎて見えない）。

慌てて胸から手を離して、その手をブンブンと振りながら、顔を羞恥に染める涼は、

誰が見ても、とても可愛らしかった。

涼が春先とはいえ高度のため寒いほどの空気で顔の火照りを覚ましている間に、自衛隊の軍艦が遠目にも集まり始めていた。

あらかじめ警戒していたためか、短い時間で3隻ほどが眼下に布陣している。

また、もう魔族の気配を感じるほどになった頃、援軍の魔法使いを乗せたヘリが到着。

それぞれの軍艦に2人ずつ乗り込んだ。

「みんなへりで来るってことは飛べるやつはいないのか、戦力としては微妙だな」

まあ、軍艦を守るくらいはできるでしょ。

それにギリギリだけど準備は整ったかな？

まっ、美鈴さんのことだから、そのあたりの準備とかは抜かりないはずだし。

俺は一匹も後ろに通すつもりは無いしな。

そんなことを考えながら涼の両手が光り始める。

光は両手から漏れ出し、前方へとフィィインといった音を立てながら延びていく。

そして1mぐらいまで伸びるとその光を衰えさせた。

ゆっくりと光が止むと涼の手には二振りの両刃の剣が現れた。

「草薙の剣、くさなぎのつるぎ ぜッ
絶！乱！ゼッ ラン！」

涼はブンツと一振りすると正面の水平線を見つめる。

「来たか」

水平線と、雲ひとつない空との境界に魔物の群れを目視する。

かなりの速さで近づいてくる魔物たちは、概算で2〜300体ほどであろう。

こちらに気づいた魔物たちは、そのどれもが凶悪な殺気を放ち我先にと向かってくる。

それらから目を離して静かに瞑った。

「〜〜ふうふううう・・・」

・・・よし！

「行くか！」

大きく息を吸い込み深呼吸して、コンマ1秒で音速を超える加速をつけて魔物の群れに飛んだ。

眼下の軍艦では慌しく乗組員が戦闘準備をしているかというところ、実はそうでもなかった。

常に警戒態勢にいるため、そんなに慌てる必要が無いこともあったが。

一番の気の緩みは、今回の作戦に白銀はくぎんの舞姫まいひめが参戦していることにあつた。

彼らもここを抜かれたらやばいということは分かっているので、戦うつもりではあるのだが……。

過去に白銀の舞姫と共に魔物の撃退をした回数は4回。

1回目は、全力で援護をしようとするも白銀の舞姫が先行して魔物を殲滅してしまった。

2回目は、今度こそと追いかけるも魔物の数が少なかったため瞬殺で終了。

3回目は、遠距離射撃するも狙った魔物がミサイルに当たる前に倒されてしまい断念。

4回目は、戦闘準備をするもあきらめ半分で観戦することになり。

そして今回の5回目。

みんな戦う気などほとんど無く、初めから観戦モードになっていて双眼鏡を片手に何分で終わるかの賭けまで始まってしまった。

さすがに上官に叱咤されるが、裏では普通に賭けが行われている。

艦長も気を引き締めるように命令したいが、どうせ見ているだけなのだし、やばくなったら命令すればいいだろう。

と、窓辺でコーヒーなんかを飲んでいるあたりは他の部下と同じような心境なのだろう。

そして、各艦に乗船した魔法使いたちは周りに乗組員たちが集まり、今回の魔物の群れ対白銀の舞姫の解説として活躍するのだった。

第2話「コーヒーを飲みながら・・・」(後書き)

ちよつと短いけどもご愛嬌。

次回は戦闘開始の予定です。

第3話「巫女能力」

涼の能力は、武器の姿形を強くイメージし。

特殊能力の有無を固定して。

魔力を注ぎ込む。

これで、武器が出来上がる。

一度作ったものは記憶に残るため、名を呼ぶだけで何度も出すことができる。

他の魔法使いが呪文を必要とするものが多い中で、涼のこの力はかなりアドバンテージが高いのだ。

そして、そんな武器を二振り携えて涼は飛んでいた。

お互いに高速で移動しているので涼と魔物差はどんどん縮まってゆく。

魔物の大多数は飛行しているが、海中を移動しているもの、海上を走ってきているものもちろはらと確認できる。

「毎回思っけど・・・海上のやつら戦う前からヘトヘトなんだよね、なんで陸上の塔の周りで戦わないのかな、
やっぱりバカ？」

そう言いながら涼は背に背負うように魔力を集中させる。

「・・・『シーカ・レイズ』」

シュワアアア！

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ！

背後に光の珠が現れた。

といつても、眩^{まぶ}しいのではなく、ただ白い球なのだが。

球は現れた場所から動かず、どんどん涼と離れていく。

その球から剣山やハリネズミを思わせる量の、刃渡り15cmはある短刀が次々と出てきた。

短刀はイワシの群れのように集まり球の周りを旋回しながら数を増やしていく。

そして・・・。

涼と魔物の距離が1000mを切った。

「喰^くらええええええ！」

両手を後ろに下げる。

背で草薙^{くさなぎ}の剣が交差し光を発し始めた。

両腕を伸ばしたまま、体の横から腕を広げるように剣^{つるぎ}を前へ持っていく。

草薙の剣は光を増幅させて2本の光の柱となった。

次の瞬間、両剣は涼が横に両手を広げきったときに魔物と接触。

ジユヲアアツアツ！

草薙の剣・絶は光に触れるものを鋭い切り口を残して塵に^{ちり}変えながら。

草薙の剣・乱は光に触れるものをズタズタに千切り、やはり塵に変えながら。

巫女服の防御機能で自分の身体が傷つかない涼は、一気に魔物の群れの中心に向かいながら両腕を前へと動かす。

群れの中心で腕を前に振りぬいたとき。

魔物の群れは扇形にぽっかりと削り取られた空間が生まれた。

草薙の剣の光は収束して、その力を残したまま刀身を光らせるのみとなっている。

「解放^{リベロ}」

涼のその一言で、背後で短刀を出し続けていたイワシ・・・、もとい短刀が流れるようにいくつもの群れとなる。

そして・・・。

ドスッ！ドスドスッ！ドスドスドスドスドスドスドスッ！！
魔物を捕捉しては次々と突き刺さった。

一瞬で魔物の群れは草薙の剣で、腕を、足を、身体を、頭を、全てを削られたもの。

身体じゅうに短刀が突き刺さり短刀の柄を外に向けた、逆針の山のようになったもの。

これらが次々と落下していく。

ここまでの数秒で100体近い魔物を倒した。

涼は、この光景を見て戸惑う後続の無傷の魔物の群れの中心へと踊りこんだ。

「シーカ・レイズ」は、進もうとする魔物と海中及び海上の（バカ）魔物を標的として、川が流れるように短刀を生み出しては逆針の山へと変えていった。

また、生きたまま落下していく魔物にしっかりと短刀がとどめを刺していく。

その針の山となった魔物を見た他の魔物たちは慌てて身をひるがえた。

しかし、それでも短刀は容赦なく近くの魔物を狙い攻撃を続ける。

魔物たちは必死に短刀から逃げようと後方へと移動していき、見つ

けた。

ただ逃げるだけで苛^{いらだ}立ちが募^{つの}る中、それを発散するための標的。

涼に狙いをつけた。

涼は舞う、その名の通り。

近づいてくる猿と虎を足して2で割って蝙蝠の翼をつけたような魔物を右の剣で袈裟がけに両断し。

その勢いのまま下にいた猫から耳を取りはらったような魔物の首を刎ねる。

空中で前回りの要領で一回転するように回りながら、背後に近寄るボール型の魔物を左手の剣で刺し貫く。

剣が間に合わないときは、足で力の流れをいなす。

バランスを崩した魔物がそのまま、まるで魔物が自ら剣に飛び込むかのように切られていく。

向かってくる魔物を如才なく倒すという戦いを続けた。

はた目からは飛び込む魔物が勝手に剣に体当たりをして死んで行くように見えた。

涼は鼻歌でも歌うかのように軽やかに、淀みのない動きで魔物を狩っていく。

海中・海上の魔物は全滅。

空中にいるのも残り100体程が、短刀に追われて涼の周りにいるのみとなっていた。

「よし、そろそろかな」

涼はそんなことを呟くと草薙の剣を一度瞬^{またた}かせて消してしまった。

魔物たちは光った剣を見て警戒心を抱く。

しかし、剣が消えると今が好機と一斉に襲い掛かった。

「『天女の羽衣』」

涼は一度ほほ笑むと両腕を左右に広げる、巫女服の袖から白い半透明のリボンが一筋ずつ真っ直ぐ伸びていく。

リボンはその見た目と、柔らかな動きからは想像もできないような鋭さを持って近くの魔物を貫いた。

そのまま貫き続け、何体かの魔物を仲良く串刺しにした。

身動きが取れずに暴れる魔物をしり目に、涼は腕を軽く動かした。

リボンは涼の動きに合わせて動き、魔物の身体をプチプチと引きちぎりながら外へと赤い血や、緑の血、紫の血を滴らせながら飛び出

した。

「さあ、^{フィナーレ}終幕だ！」

そう言った涼の巫女服の袖から同じリボンが幾十も噴き出した。

リボンは緩やかに曲線を描きながら。

涼を中心に縦横無尽に動き出す。

魔物たちは成す^{すべ}術なくやられていく。

硬い亀の甲羅のような皮膚を持つ魔物は幾筋も纏まったりリボンに刺し貫かれ。

象のような体格に人の手を10本つけたような魔物は抵抗する間もなく両断され。

スライムのように切っても無駄な魔物はリボンが広がり包み込み、さらに何重にも包んだ後に内部が爆散！跡形も残らなかった。

その姿は巫女というには勇猛すぎた。

その姿は戦^{ヴァルキリー}乙女というには優美すぎた。

その戦いぶりは強靱であり。

その戦いぶりは流麗であり。

猛禽類を思わせる金色の瞳には愛しさすら感じさせ。

幼さの残る顔立ちは美少女と断ずるに申し分なく。

肩口まで伸びる輝き現す白銀の髪を軌跡に残し。

清廉な純白に蒼の筋を持つ巫女服を身に纏い。

醜い魔物の中で舞う姿はどこか雄大である。

人々は教えられなくとも、彼女の戦う姿を見て、
彼女が望もうが望むまいがこう言った。

『白銀の舞姫』・・・と。

涼はこの戦場を。

目で確認し。

知覚で魔力を読んで認識し。

リボンで触れることで触角を共有しているので感覚が伝わる。

それらを瞬時に理解、判断することで魔物個別に的確な攻撃を行っていた。

その戦況を見るために、涼は舞を踊り続けた。

「ここは戦闘区域から10kmほど離れた艦上。」

「今日も瞬殺だな」

「ああ、もうすぐ終わりそうだよ」

双眼鏡を右手に、「5分で終了」という賭け札を左手に持った乗組員が話している。

「それにしても毎回思っけど、あのリボンは反則だな」

「どんな奴も狙われたら死ぬだろうな」

「ワンスのマンガに出てくる自然系の能力者でも勝てないかな」

「いや分からねえし、けど・・・勝てねえんじゃね？」

「なんでよ」

「なんとなく」

「そうか・・・」

「ああ・・・」

実に平和であった。

「これで終わりつと」

最後の魔物を仕留めた涼はリボンを納める。

そして、遠く海上に浮かんでいる軍艦に向かって飛ぶ途中に、『シ
ーカ・レイズ』をしっかりと止めていった。

艦上では皆が喜ぶ中、何人かが手元の紙を見て落胆の表情を見せていた。

第3話「巫女有能力」（後書き）

戦闘の描写って書くの難しいです。
読みにくかったら申し訳ない。

今回の話で涼の能力がだいたい説明できたと思います。

これからいろいろな種類の武器や強力な武器を見せていきたいと思つので、のんびりとお待ちください。

第4話「パレード」

俺は今、援軍に來た魔法使いたちと共に東京で軽い凱旋パレードっぽいことを行っている。

実際のところ援軍の魔法使いたちは活躍することはなかったのだが・
・・・。

人々の前で天皇様よろしく手を振っているのである。

普段なら絶対に参加しないのだが、今回はある事情により参加せざるを得なかった。

「めんどくさいな〜・・・」

早く家に帰って寝たいのにな〜。

1人ぼやく声は周囲の歓声によってかき消されてしまった。

それは、今より30分ほど前。

『・・・おい、聞こえる〜?』

『涼ちゃん。』

援軍に来ていた艦隊の上を旋回して、
さて、帰るかな……。。

と思ったときに

よく聞きなれた声が頭の中に直接響いてきた。

「ちゃん付けはやめてください、美鈴さん」

言うべきことはしっかりと覚えておく。

こういうのは繰り返しが大切だ。

だけど……。

さっき携帯で連絡してきたのに、なぜに今は念話何だろう？

今も携帯を使えばいいのに……。

実際は念話のほうが便利だけだな。

「……ああそっか！」

そこまで考えて気付いた。

変身前に身に着けていたものは洋服から携帯から全て分解されるんだった。

つまり簡単に言つと某月の戦士（2回目の登場）のように一度全裸になってからこの装備になるから、変身前のものは無くなるということだ。

そこ！

変な想像しないように！！

ちなみにそれらがどこに消えるかは謎だ。

いまいちその辺りが分からない。

自分の能力なのに……。

まっ、変身を解けば戻ってくるから結果オーライということぞ！！

だから今は携帯がないので念話ね、なるほど。

『……い、き……る……』

ん？

『……聞こえるか？』

やべっ！

美鈴さん無視して考え込んだじゃったよ。

「いや、聞いてましたよ」

『ウソでしょ。』

はい、看破されました。

「聞いてなかったです、すみません。・・・で何の用ですか？」

都合の悪いことは忘れて本題に入りましょう。

俺も話したいことがあったし、ちょうどよかった。

『ん〜。連絡事項と結果報告の確認だよ。まず連絡事項だけど、局長が今日も下痢でね、10日連続でさ〜そろそろ死んでほしいのが一点。シンガポールの援軍に行ってた神楽ちゃんが1時間前に、戻ってくるって連絡があったのが一点。日本海でたった今戦い終わった駿介くんが、空間移動系の魔物を逃がしたらしいから一応に気をつけといてってのが一点。最後に涼ちゃんようにお洋服用意したからぜひ着てほしいってのが一点。こんなものか〜。涼ちゃんの結果

はどうだった？』

なんか基本的に全部どうでもいいような情報だ。

しかも、つつこみどころ満載でどうしてやろうか、と考えて・・・。

はああゝああ。

とため息をついてスルーすることにした。

「こっちはおよそ300いた魔物を殲滅しました。被害は無し。けど1つ気になることがあるんです。」

俺は美鈴さんの話など何もなかったかのように事務的に淡々と話す。

「魔族が一人もいませんでした。とくに先導している強力な魔物がいたわけでもないのに妙だったんですね。まあ戦いが楽だったからよかったんですが。」

そう、俺が戦った群れの中に魔族がいなかったのだ。

基本的に魔物は動物と同じようなものなので自由に気ままに動き回る。

だが魔族は彼らを自らの魔力で持って多少意のままに操れるらしいのだ。

だから魔族の強さにものよるのだが、大抵300もの魔物の群れであつたら4〜6人は魔族がいるはずなのだ。

でなければ魔物は勝手に動き回つてしまい、人間界を意思を持って侵略など到底できない。

たまに意思を持つ強い魔物も生まれるけどな。

意思を持つ魔物はごく稀、魔物は魔法なんかは使わない（使い方が分からないためほとんどは身体強化などに使われる）けど、意思のある魔物は魔法を使いこなすので下手な魔族よりよっぽどたちが悪かったりする。

同じ魔物ということで統率力が高いからな。

まあ俺には全く関係ないけどね。

多少強いくらいなら油断しない限り負けることはまずない。

つまり、魔族もいなければ、意思ある魔物もいなかったのが気になるというわけだ。

美鈴さんは美鈴さんで先ほど『ちよつと待つて』と言ったきり、なんの反応もない。

どうしたのかな、聞いてみよっ！

待つって苦手なんだよね、俺。

「みれ……」

『オッケー！決まったよ、涼ちゃんとりあえず東京の本社に来て』

先手を取られた……、っていつかなんだって？

「いやです！」

断固拒否しようなんかめんどくさそうだ。

『拒否は認めません、命令です』

「実は用事が……」

『ウソはだめです、来なさい！』

美鈴さんの強引さは昔から知っていた。

だからこんなときの対処は……。

「わかりました」

言うことを聞くしかないのである。

情けないと言っな！

『初めから素直に従っておけばいいのさね。そうだ！ついでにパレードにも出なさい！あなたが出ればみんな喜ぶから一石二鳥よ！』

「えっ！？……はい」

俺には拒否権なんてないんだな。

そんなふうにしみじみ思っていると……。

『何着てもらおうかな』

そんな声が聞こえてきた。

なんか上機嫌に鼻歌まで聞こえてきた。

つつ！！？まさか！！

「洋服は着ませんからね！！」

『え~~~~~~~~』

そこだけは断固拒否しておこう。

NOといえる人間になるのは大事だよ……、うん。

そして、今は道路の真ん中を歩きながら手を振っている。

なんかすごいうるさい。

キヤーやら、ワーやら、キヤーやら、ワーやら、キヤーやら、ワーやら。

なんかいろいろ言っているのが聞こえる。

「きゃー、本物よー!!」

「綺麗な髪ー、天使みたーい!」

「こっち見たわ!私を見てくれたわー!!!!」

「俺の彼女になってくれー!」

「なんか魔法見せてー!」

「サインくださーい!サイン!」

「俺の嫁ー!!!!」

「こっち見て！こっちよ」

など雑音と化しているが耳をすませると色々と聞こえる。

何人か変態な奴がいたが無視だ！無視！

「めんどくさいな」

そう言っただけなのにしているが営業スマイルは忘れない。

一応国のヒーローっていうか、アイドルみたいになっているらしい。

普段こういう場に顔を見せないから神聖化されているっぽかった。

見た目が確かに神秘的だしな。

そんなことを考えていると……。

トスッ

首に何か刺さった。

第4話「パレード」(後書き)

続きの話今書いているのですぐ出ます

たぶん・・・

第5話「最後の言葉」

トスッ

首に何か刺さった。

敵なんかいないと思っていたので、顔周りの結界を解除してあったのである。

「なっ！！！！？」

急いでそれを首から引き抜く。

注射器だった。

羽根のついた注射器。

なんでこんものが……。

そう思う間もなく強烈な眠気が襲ってきた。

「くっ!!」

一気に全身の力が抜けていく。

そのことに気がついた周りの市民が何人か悲鳴を上げる。

刺さってからかなり素早く注射器を抜いたのによく気付いたな……。

なんて考える余裕さえない。

乱れていく魔力をなんとか整えて、周囲を観察して……。

「見つ……けた……」

注射器が飛んできた方向を知覚の目で凝視すると銃を持っている男を発見。

「天女の……羽衣……」

そついった俺の巫女服の袖から半透明のリボンが伸びて、一瞬で男を簀^{すま}巻きにする。

リボン越しに、男の思考を読む。

『見つけてくれた！俺だけの・・・！！俺だけの舞姫だ！俺から迎えに行こうと思って眠ってもらったけど、君から来てくれるなんて感激だ！』

さあ！一緒に行こうよ。

俺は君のために生まれてきた。君は俺のために生まれてきたんだ！』

精神が病んでいる・・・。

考え事をしていたとはいえ、殺気がなかったので気が付けなかった。

殺してやるうかとも思ったが、やめておく。

こんなやつ殺す価値もない。

羽衣を切り離して簀巻きの状態の男を放置する。

注射器に気がつかなかった周りの市民たちや後方の魔法使いたちは、突然『天女の羽衣』を出した俺に驚いているが、今はそれどころではない。

一体どんな薬を使ったのか分からないが強烈な眠気は一向に覚める心配がない。

「く・・・そ・・・」

俺は耐えきれなくなって片膝をついた・・・、

強烈な魔の気配を感じた。

正面の50mほどの距離、地上から5mくらいの位置に何かが現れた。

普段の俺ならなんともない距離。

普段の俺ならたいした事の無い魔物。

けども、……今は違った。

全身が紫色で象並みの大きさ、動物というより、形を捉えづらく不定形で無機質に近い身体を持った魔物は、空間の亀裂のなかで真っ白な魔法使いを見ていた。

あいつを食べたい。

そう思ったが、ついさっきおいしくなさそうな魔法使いと戦ったときに怪我をした。

だから今食べに行ってもやられてしまうかもしれない（無傷でも殺されるが本人は気づいてない、所詮けものだから）。

だけどチャンスが来た。

真っ白な魔法使いの魔力が突然乱れ始めたのだ。

フラフラと頼りなく、今に倒れてしまいそうだった。

今なら……、

殺せる。

意思のある魔物は涼を殺すために空間から這い出した。

魔物は空間の裂け目から姿を現して1秒も時間をおかずに、その不定形で生物のようでも無機質の硬さをもっている体表から、直径10cmで長さ1mはある棒状の物体が突き出て、涼に向かっていくつ

も撃ち出された。

「ヴォオオオオオオオオオ！」

T T T T T T T T T T

声というよりは音。

けっして生物には出せない異質な音を空気に震わせて、魔物は涼に攻撃を続ける。

涼は必死で朦朧とする意識の中リボン状ではなく、広げて羽衣状にして攻撃を防ぐ。

魔物の攻撃はただの質量てきな重みだけでなく特別な負荷も掛かっているらしく、羽衣1枚だと2発くらいで抜かれてしまう。

意識を保つため自分で自分の身体を傷つけるが、ほとんど効果がな

次々に飛来する紫色の棒を受け止めるため羽衣を幾重にも展開していく。

涼の戦闘のスタイルとしては受け流すほうが得意なのだが、注射器の催眠剤で意識がはつきりしないため『天女の羽衣』を精密に操作できないことと、受け流せば周囲の市民にまで被害が出る。

だから、ほんらい得意としない真向うからの攻撃を受ける羽目になっていた。

ここにきてようやく後ろにいた魔法使いたたちが援護をしてきた。

しかし。

「やめ……ろ……」

涼はそれをとめようとするが声がかすれる様にしか出ない。

後ろの魔法使いたちでは束になるうがこの魔物は倒せない。

殺されてしまうのがわかる。

それを止めようとするが、涼が何も言えず、何も行動できないうちに彼らは動いた。

「うおおおおお!!」

「舞姫様から離れろおおお!!」

ドオオオン!

ガギギイン!

キンキンキン!

魔法使いたちが攻撃するが魔物の皮膚を軽く引っ掻いた程度にしか傷を与えられなかった。

「ヴオオオオオオオオオオオオ」

魔物は奇怪な音を発すると、目ざわりとばかりに後ろの魔法使いた

一度抜かれるとあとは次々と棒が身体に当たる。

味方の魔法使いの1人がなんとか攻撃を防ごうと前に飛び出し、何本が耐えただけで肉片に変わっていくのを、涼は別の世界の出来事のように見ていた。

もはや『天女の羽衣』は紫の棒を半分ほどしか防御しておらず、羽衣を突き抜けた棒のうち3分の1は涼の身体に命中する。

「あ・・・ぐああ・・・、ぐああああ・・・」

涼は棒のあたる衝撃と催眠剤によって半分以上の意識が飛ばされる。碌な抵抗も行えず、されるがままとなっていた。

ビシッ！

それまで棒をはじいてきた巫女服。

その防御機構が不吉な音を立てた。

ビシビシッ！

パリイイインンン！

巫女服の防御機構が碎けた。

次の瞬間！

「うあああああああああああ！！！！！！！！」

涼の右のわき腹に直径15cmの紫の棒が深々と突き刺さっていた。

魔物は攻撃をやめない。

棒は防御することのない涼の身体を蹂躪する。

右足の先が叩き潰される。

左手のひじの部分が半分えぐれて、腕はかすかにつながっているだけとなる。

右の肩口に当たり、涼の身体が衝撃で跳ねて純白の髪を血で赤く染めていく。

身に纏う白い巫女服は涼の身体を守ることはず、傷跡から赤い血の染みを広げていった。

周りにいる人々は、この一方的な殺戮をなにもできずに、皆一様に蒼白な顔で見つめていた。

「あ……うあああ……うあああ……」

涼が声にならないうめき声をあげる。

お・・・れ・・・、死ぬ・・・のか・・・な・・・

手を動かそうとして動かないことを気付いた涼は、最後に自分を殺すであろう魔物を見ようと、意識を手放しかけていた脳を動かし、瞳をあけた。

その眼には、紫色のよくわからない形の魔物が写る。

は・・・はは・・・、みに・・・く・・・いな・・・

・・・死に・・・た・・・くねえな・・・

そう考えて意識を手放す瞬間に・・・

醜い紫色の魔物が粉々になったように見えたが・・・

涼にそれを確認する力は残っておらず・・・

静かに目を閉じた。

第5話「最後の言葉」(後書き)

自分で書いていてテンション下がってきました。

第6話「俺が魔族の嫁に!？」

近づいてくる紫色の圧倒的死的予感。

逃げようとするが足が動かない。

魔法を使おうとしてもなぜか発動しない。

やめろ!来るなあ!

声を出そうとしても出ないことに気がついた。

紫の棒が近づいてくる。

それが今まさに自分の身体に刺さる瞬間!

「うあああああああああ！！
．．．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．ああ」

荒い息を吐いて布団の中で目をあける。

「ゆ．．．め．．．？」

今が夢だったのだと気がついて安堵の息を吐く。

「痛っ．．．っ〜っ〜」

身体が痛い。

魔物に貫かれた場所が痛い。

その痛みで完全に現実に戻された。

自分を襲った魔物のこと。

普段の自分ならそれほど苦戦することのない魔物だった、
だけど催眠剤を打たれたためまともに戦えなかったこと。

そして身体に走る激痛と、命が抜けていく感覚。

全てが鮮明に思い出される。

「は．．．ははは、俺．．．生きてたんだ．．．」

涼は布団に横になった状態で声にならない笑いをあげながら、目を

閉じて涙を流した。

一通り泣いて落ち着いた涼は、自分の身体が動くことに気がついた。あれだけの攻撃を受けたにもかかわらず、腕や腹の傷はほとんど塞がっているようだ。

さすがにまだ動かすと痛い但我慢できないほどではない。

涼は起き上がって布団の上に座った状態で周囲を見渡した。

今自分が寝ているのはベッドである。なんの飾り気もないが無駄にでかい、ダブルベッド以上はあるのではないか？

「どこの貴族だ〜！」と叫びたくなるでかさである。

部屋は石造りで灰色の石が見えているのだが汚いとか、冷たいといった雰囲気はなかった。広さがまたでかい、バスケットのコートくらい広い部屋だが扉が見えるのでこの部屋だけではないのだろう。

「一体どれだけ広いのやら？」

壁には絵画や剣が飾ってあるが、目立つようなものではなく壁と一体になっているかのようであった。

どことなくさみしい部屋だな。

全部の部屋がここと同じとは思わないけど、それにしてもなにもな

さすぎる部屋だ。

けど、ここがどこであるかはわからなかったため、涼はちょっと調べてみようと布団から出た。

「よつと！」

布団から這い出した涼は、裸足で石畳の床に触れて案外冷たくないことに軽く驚いて……

自分の姿を見てもっと驚いた。

「なんだこれは……！！！」

身体の傷がないのは回復系の魔法でも使って、誰かが直してくれたんだと思う。

あれだけの怪我がよくここまで治ったものだ。

それよりも、まず性別が女のままだった。

変身中は常に魔法を使っているような状態だから女になっているが、意識を失って時間がたつと男に戻ってしまうはずである。

それが弱点でもあるのだが……

だが、今の涼は女の状態である。

あれだけの攻撃を受けて、意識を失えば絶対に男に戻っているはずであった。

あともうひとつ。

「なんでドレス……」

そう、涼はドレスを着ていたのである。

真っ白なドレス、無駄にフリフリした装飾が多いが見ようによってはウエディングドレスにも見える。

「わけがわかんねえし！」

そう言っただけで涼は巫女服に換装しようとして魔力を込める……が。

「なん……で？」

魔力が集まらない。

試しに武器を出そうとするが全く出てこなかった。

「ふん！ふん！」

腕を振りながら力づくで「出る」とかやるが、全く反応がなかった。

「もしかして……俺……魔力が無くなったのか？」

そういつて涼は首を振った。

「いやいやいや、そうだったら俺が女のままのわけが無い。という
か目が覚めてからわけがわからんことばかりだ」

キイイイ・・・

そういつて涼が部屋を物色しようと歩き始めた時、扉が開いた。

扉が開く音に気がついた涼は、その方向を凝視する。

そして、開ききった扉の前に立っていたのは1人の男だった。

190cmはあるつかという長身に切れ長の瞳、短い赤髪を軽く遊ばせている、西洋の世界から抜け出てきたような印象だ。

男は涼のことを観察しながら無言で涼に向かって歩いてくる。

「な・・・なんだよ・・・」

何なんだよこいつ。

涼が若干身を引きながら警戒していると、男はこちらを見下ろしながら涼から2mほどの距離で立ち止まる。

「ほお、似合ってるじゃねえか」

は？なんだこいつ！

「うるせー！俺の趣味じゃねえ！」

男は、「くくくくくつ」と笑ってまるで意に介さずに笑う。

「ここどこだ！そしておめえは誰だ！！」

こいつ、なんかムカつく！

男は涼の言葉を気にした風もなく、手を横に広げてやれやれといったような態度を取る。

渋谷とかのナンパ師っぽい雰囲気でもある。

いちいちムカつくやつだ。

「ここは魔界だ、お前らの住んでいる人間界とは次元の違う世界だ。そしてここは、王都ラディスオン帝国の城にある俺の私室だ。あと、「おめえ」ではなく、バストマ・クレルという名がある、クレルと呼べ」

すげー上から目線で話してきやがる！

「ここがどこかは分かった。で、なんで俺はここにいるんだ！」

「俺がさらってきた。人間界になかなか強い面白い女がいると聞いていたのでな、観察しに行ったわけだ。そしたら、あの程度の雑魚魔物に殺されかけていたからな、助けて連れてきたってわけだ」

ぐう……、最後にあの紫のやつが砕けたように見えたのは現実だったのか……。

なんか魔族に助けられたなんて釈然としないが……。

「……ありがとう。……一応命の恩人だから礼だけは言っておく、もう帰っていいか？」

こんなところに長居をする気はない、とつと帰ってやる。

「それは無理だな、お前はこの俺の嫁になるのだから」

……え？

「は？」

「聞こえなかったのか？嫁になれと言ったのだ」

いやいやいやいやいやいや。

意味わかんねえし、意味わかんねえからね。

なんで？

Why？

こいつ頭おかしいんじゃないか？

「無理！」

涼は腕を交差させてバツの形を作る。

「拒否権はない。命令だ」

「いや無理だから。意味分らないから！」

クレルは一度思案する顔になると、「しかたないな」という態度で話し始めた。

いちいち癪に障るやつだ。

「俺たち魔族の嫁探しは大変なんだよ。貴様ら人間と違って魔族は寿命が長いが子供を作るのは難しい。性交なりキスなりして男の体液が女の中に入ると魔力も一緒に流れ込んでしまつて、このときに男の魔力が女よりも大きすぎると・・・ボンっ！と女が弾けるわけだ。だから子供を作るには自分よりも魔力の高い女が、同程度の魔力を持つ女が相手じゃないと、女が死ぬ。分かったか？」

「・・・いや実際興味はないけど、その辺の事情はなんとなくわかった。・・・で、なんで俺？」

「人間相手でも子が成せるらしいからな、文献で見たことがあるが、昔そんな奴がいたらしい。それに、姿を隠してお前の戦いぶりを見ていたが、お前の魔力の強さと波長は俺のとかなり近いからな、だからさらってきたってわけだ。けどあの魔物が出てきてラッキーだったな、お前と真っ向から戦っていたら俺が勝つにしろ大変だっただろうからな」

「さっき俺が言った礼を返せ！見てたのかよ、変態が！それにお前たちの魔族事情など知らんし、おれは男だ！なんで男の俺が、男のお前の嫁にならなきゃなんねんだよ、お断りだね！」

矢継ぎ早に発せられる俺の罵倒をまったく気にせずに受け流しすくレル。

「お前が男と言うのは俺も驚いた、運んでいる最中に男になったかな・・・」

「じゃあ、なんで今は女になっているんだ。俺の意思じゃないこの姿にはなれないはずだぞ」

涼はまだ警戒しながらクレルをにらみつける。

実際背の低い涼が、背の高いクレルをにらみつけると上目遣いのようになるので、かわいい雰囲気しか出ていないが涼は全く気付いていない。

「・・・・っ!？」

クレルは若干目を逸らしながら俺の左の手首を指差した。

ん？手首？

左の手首を見ると何か薄紫色のカーテンのような、オーロラのようなものが纏わりついていた。

なんだこれ？

「俺の魔力で固めた枷をお前の腕に付けた。それには女の姿を維持しておく能力と、お前の魔力を抑え込む能力が付加されている。男の姿のお前など興味がないからな、俺がその魔法を解かない限りお前は一生女のままだ。だからなんの問題もない」

「な・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふ・・・・・・・・ふざけるな、一生おんなのままだと、そんなことはお断りだ。

断じて拒否する。

「分かったら嫁になれ。これはもう決定事項だ」

知ったことか！

「このこの！」

俺はクレルを無視して、腕に付いているオーロラのような腕輪を取ろうとするが、まるで空気のように触れることができない。

なんと試しても何の効果もなかった。

クレルはそんな俺を見てため息をつくと手招きをしたてきた。

「とりあえずこっちに來い」

「断る！近づくな！」

誰が行くかバーカ！

「ったく・・・」

クレルが涼の視界から消えた。

「えっ・・・、うわああ！」

一瞬で涼のそばに移動していたクレルは、ひょいっと涼を肩に担ぎあげる。

「な・・・な・・・は・・・離せ！降ろせ！触るな！」

いきなりすることに動揺した涼はわめきながら暴れるが、力を完全に封じられているため全く抵抗という抵抗もできていない。

クレルは涼を担ぎあげたまま部屋を出て、どこかに向かっていた。

「は～な～せ～よ～！」

涼は手と足をばたつかせて抵抗を続ける。

「うるせえ！」

パンツ！

クレルがいかげん堪りかねて涼のお尻を叩いた。

「ひゃあっ！」

え、何今の？

俺の・・・声？

自分でも理解できないほど高い声で悲鳴を上げたことに驚く涼。

「はっはっはっは、かわいい声で鳴くじゃねか」

クレルはそう言いながら何度も涼のお尻を叩く。

「痛っ！にやっ！ううう！ちよっ！もうっ！やめっ！」

涼は、涙目になって抵抗することなく弱弱しく抗議をする。

「最初からおとなしくしていればいいんだ」

そう言って叩くことをやめてくれたクレルだが、もう10回以上叩かれた。

ううううう・・・

いたい・・・、おしりが・・・

唸りながら干された洗濯物のように無抵抗になる。

クレルは階段を降りて、廊下を歩いて。

10分ほどで立ち止まった。

「ほら、着いたぞ」

そう言つてクレルが降ろしてくれたのは、すこしジメジメとした暗い石の通路。

等間隔で灯された松明が僅かな明かりを通路にもたらしているが、それでも夜の月明かりよりも頼りない。

「お尻が〜」

お尻の痛みでちょっと歩きにくいので歩かないことにする。

涼は、そして周りを見回した。

「なんか牢屋みたいな場所だな」

「ここは牢屋だ」

クレルが松明を持ってきながらそう言った。

「ま、まさか俺を閉じ込めるのか!？」

「……いや、けど……こいつの嫁と虜囚の身となら、牢屋のほうがましかもしれない……」

涼がそう言ってぶつぶつ言っているとクレルが松明で辺りを照らしながら歩いていく。

「俺が自分の嫁にそんな事をするわけがないだろ。それよりもこれを見る」

バカかお前？と言っているかのような顔をして俺を見降ろしてくる。若干いらつとしながらクレルが照らした牢屋の中を覗き込むと、そこには20人ほどの人間が捕まっていた。

「なんで、人間がいるんだ？これも嫁とかにするつもりか？」

涼が本気でそんなことを言いながら中を覗き込む、中の人間はこちらには特に関心がないようでちらつとこっちをみたがあとは無関心だった。

「これは、お前のために用意した人質だ。俺の嫁にならなければこいつらを1人ずつ殺す。わかったか？」

クレルは松明でわずかに見える暗闇の中、それでもはつきりとわかるくらいに満面の笑みで言い放った。

「そんなの卑怯だ！それに俺は男だって言っただろ！」

「そうか・・・、残念だ」

そう言って、クレルは松明を持っていないほうの手を牢屋に向けていく。

その手に魔力が集まり始めて・・・

くつつそ〜〜！

なんで、俺がこんな目に！

「分かった！なるよ！なる、お前の嫁になるからその手を下せよ、
・・・な」

「そうか、それは良かった」

クレルはそう言うつと元来た道を戻り始めた。

こいつ、絶対にSだ。

不本意だが嫁になるしかないらしい・・・。

だけど、それならこいつの寝首をかくことも可能ってことだ。

それに、この城の王を倒せば人間界の侵攻も終わりになるんじゃないか？

だったら、むしろこの状況はラッキーだったってことか・・・

「そう思わないとやっていけねえよ」

涼はぶつぶつと呟きながらクレルの後を着いていった。

第6話「俺が魔族の嫁に!？」（後書き）

文才が、文才がほしいよ

ということ、ようやく嫁になりました。

あとはいかにふくらませることができかが力ギですね。

最後に、もし暇があるようでしたらご意見・感想お待ちしております。
ます。

ではノシ

第7話「俺から私」

「・・・はあ・・・はあ、ところでさ・・・、お前はいつから・・・俺に目をつけたんだ？」

涼はクレルの背中をトコトコと小走りに追いかけながら話しかけた。
身長差40cmくらいもあれば歩幅にも大きな違いができる。

先ほど「もつとゆっくり歩け！」と言ったら「走れ」と返されてしまい、魔力0の状態のため身体能力の向上もできない涼は頑張っ
て付いていくしかなかった。

クレルは涼の質問を聞き、眉をひそめた。

涼はクレルの後ろ姿しか見えないため、その変化に気づかずに「な
んでだ？」と小走りしながら繰り返し問いかける。

「おい・・・」

「うわっと・・・、なんだよ！」

クレルが突然立ち止まり振り向いたため、止まり切れなかった涼は
クレルにぶつかりそうになって、慌てて手を出して顔面衝突を回避
する。

身長差的に正面に出した手はクレルの腹に、ぽすっという軽い音と
ともにあたることになる。

「腹筋硬いな」なんて考えてる涼を見下ろしていたクレルが、涼の頭をつかんで引き離れた。

「うい……」

「何をしている……。いや、どうでもいい……。貴様はこれから『俺』と言うことを禁ずる。なんか気に入らん！あと俺のことはクレルと呼べと言ったはずだ」

そんなことを言っただけでクレルが俺のことを見下ろす。

「お前のことをクレルと呼ぶのは別に問題ない……。だけど、俺と言っただけで否定されるのは嫌だ。俺はあくまで男だ！」

「気に入らん」なんてわけのわからない理由で一人称を変えられてたまるかっての。

「前に言っただけで、貴様に拒否権は無いと、『俺』ではなく『私』と言え、さもなければ人質を殺す。わかったな」

クレルは言いたいことを言いきるとさっさと後ろを向いて歩き始める。

なんだ、あいつは……！

自分の言いたいことだけ言いやがって、しかも、わ……。わたしって女みたいじゃないか！

「くそつたれ！ふざけんな。ばーかばーか……」

クレルに聞こえないように小声でむなしい抵抗をする涼。

「何か言ったか？」

振り向きやがった！

クレルは立ち止まって涼を見つめる。

「え……？あゝ、その、あれだ……。そう……名前！俺のな……。じゃなくて、あつ……。わ……。わた……。わたしの名前は涼だ！貴様じゃない！おま……。クレルも、お……。わたしのことは涼って呼べ」

何を言っているのか支離滅裂になっている上に、頬を上気させて手を、わたわたさせている涼のこと見ていたクレルは、手を伸ばして涼の頭をがしつと掴むとぐりぐりと撫でる。

「それもそうだな、これからは名前で呼ぶでしょう……。涼」

頭が身体にめり込むほどに力強く押し込まれるように撫でられていた涼は、うああああ……。と呻く。

だが、いいかげんにやめろ！と言って手を振り払う。

クレルは気にした風でもなく、軽く笑いながら歩くペースをさつき

よりも少し落として歩き出すのだった。

石の壁に石の床の部屋。

しかし、床にはフカフカで毛の長い一目で高級なものだと分かる絨毯が敷き詰められ、壁には草原と青空が描かれた絵画に、見たことのない文様が記されたタペストリーが品よく掛けられている。正面には陽光を取りいれる無駄に大きい窓ガラス、それを開けると大の字になって寝ても余裕があるテラスが静々と佇んでいる。椅子や家具はゴテゴテした装飾は見当たらずシンプルでいて、しかし安物という雰囲気は感じない落ち着きがあつた。落ち着きのある高級ホテルのようである。

「ほああああ〜」

涼は目を丸くして部屋を見て回っていた。

いくら人間界で10指に入る魔法使いだと言っても出身は一般人の出なので、涼は高級ホテルなんて縁も所縁もない。

テレビでは何度か見たことはあるのだが、実際にそれっぽい部屋を見してみると違うものだ。

「クレル！ここお前の部屋だろ、無駄に広いなオイ！」

涼は興味心身に部屋の調度品を見回しては「ほ〜」とか「へ〜」とか呟きながら、ちょこまかと動き回っていた。

クレルは部屋に常駐している侍女から紅茶を受け取り椅子に腰掛けて、ゆっくりと飲みながら涼のことを目で追っていた。

「ところでさ」

あらかた部屋を見終わった涼は、とうの昔に飲み終わった紅茶の力ツプを机に置いてのんびりとしているクレルの前に移動して、「……ん」と言いながら仁王立ちして顔を^{しか}顰めて腕を突き出した。

クレルは怪訝な顔をしてその手をスツと流し見て、涼の顔を^{うかが}窺い見る。

「……これ、はずせ」

淡い紫のオーロラを纏う腕を突き出した涼は、クレルを睨みつけながら口を尖らせる。

「ふん……、断る」

「だろうな……、じゃあ魔法を使えるようにしろ」

「……それなら良いだろう、元から魔力は使えるようにしてやるつもりだったしな……」

クレルはそう言つとスツと涼の腕輪を見た。

オーロラを纏う腕輪が光るなどの変化はなかったが、涼は自分の身

体の奥から暖かいものが満たされてくるのを感じる。

お〜、これが魔力なのかな〜、いつも魔力なんて身体に満ちてるものだし、初めての感覚だ〜。

そんなことをボヤ〜と考えている間に魔力の充足が収まってきた。

「ん？おいクレル。なんか魔力量足りないぞ、返せ！」

自分の普段の魔力量なんか完全には把握していないが明らかに足りないということは分かる。

「全部戻して好き勝手暴れられたら堪ったものじゃないからな、だいたい三分の1くらい使えるようにしてやったんだ、ありがたく思え」

なんか腹立つんですけど！

この人ムカつくんですけど！

すげえ偉そうにふんぞり返りながら感謝しろとか……、お前のせいで魔力使えないんだから！

とは言えない。

くそつ、・・・けど全部戻さないのは納得いく。

俺だってあいつの立場なら全部なんて戻さない。

それ以前にいきなり攫った拳句に求婚なんて迫らない。

「まあ、いい」

クレルの言うことはすべて無視することにした。

涼は踵を返して距離を取る。

「『くさなぎのつるぎ草薙の剣・乱』」

涼の右手が光り、光が伸びる、一定の距離まで伸びた光は収束して一振りの剣が姿を現した。

調子を確かめるように3、4振りして再び光とともに剣は姿を隠した。

「ふむ・・・」

問題はないかな、多少力をセーブする必要があるかもしれないけど、なら・・・。

「『天女の羽衣』」

前に羽衣を出したときは白い巫女服の袖口から現れた羽衣だったが、今は巫女服ではなく白いドレスを着ている、もちろん袖口からなど出せないため羽衣は涼の身体に纏わりつくように姿を現し、両腕から足元まで垂れるくらいの長さで風もないのにゆらゆらと揺れていた。

「お、出た出た。．．．どれっ．．．」

そう言っていると腕を払うようにすうっと横に伸ばすと、羽衣も一緒に動き、そのまま伸びていく。羽衣は伸びた先の椅子を持ちあげて器用にくるっと回すと、またもとの位置に戻した。

「問題ないかな．．．」

実際、普段戦うときとかもよっぽどの相手じゃない限り全力で戦わないからな。

多少力を抑えられてもある程度まではいつも通りってことか．．．。

そういえば、まだドレスのままだったな、普段巫女服で一応アレも女ものだけドレスよりはましだ。

このピッタリ感がなんか許せない。

ていうか変身状態で洋服着れたのか、いつも変身と同時に巫女服になっていたから、脱ぐとか考えたこともなかったよ。

涼の身体が光りに包まれて、すぐに収まる。

そこには白に蒼地のラインが入った巫女服を纏った少女が立っていた。

「おい」

涼はクレルに背を向けて黙々と作業していたのだが、その背中にクレルは声をかけた。

「なんだよ・・・」

いかにも嫌そうに顔を顰めながら振り向く。

「一言言っておく、その衣装が許されるのは城内や城外だけだ、この部屋ではさっきの出レス姿でいる。命令だ」

「はあ！？なんでだよ、意味わかんねえ」

「あえて言うなら俺の趣味だな・・・、断れば人質を殺す。分かっただな」

「　　・・・」

涼はしぶしぶ元のドレスに戻った。

さっきのピツタリとしたやつだ・・・、泣ける。

しばらく不貞腐れていたが気持ちを切り替えたらしい涼はクレルに話しかけた。

「そつえばお・・・、私の部屋はどこだ？」

そうじゃん！自分の部屋にさえ行けば何してもオツケーだよ。

とか考えての質問だったが、そんな涼を見透かしていたかのようにクレルは楽しそうに口角をあげて答える。

「俺と同じ部屋に決まっているだろ、もう婚姻したのだからなぜ部屋を分ける必要がある？これからは、食事も、風呂も、寝るのも、いつも一緒だ。うれしいだろう？俺は楽しみでしょうがない」

クレルはにやにやと笑いながら本当に楽しそうに涼のことを見つめる。

「・・・・・・・・・・は？」

・・・・う、うれしくねえ！！

何がうれしくて男と同棲生活せにやなんのだ！

食事、・・・・は別に大丈夫だ、大したことはない。

風呂、・・・なぜ？いやいや一緒に風呂とか考えられない。

どんな風呂かは知らないけどクレルの後ろにメイドさん？侍女さんかな？が、居るということは、この城の風呂は前に小説で読んだことがある感じの寄ってたかって身体を洗われるとかかもしれないな〜と思ったが、そのほうがまだましだ！

実際どっちも嫌だけど、どちらか選べと言われれば間違いなく侍女さんたちの視姦プレイのほうがいい。

むしろ1人で入りたい、女だからとかではなく、俺は日本人ですから、シャイで有名な日本人ですから。

最後に寝るって、・・・寝るって！寝るだけじゃ済まないだろ！すっげえ嫌な予感がする・・・、断固拒否したい、後ろの二つは断固拒否したい。

大事なことなので2回言いました。
じゃなくて！現実逃避したいな〜。

涼は真っ赤になって首をぶんぶん振る。

無理！なんか無理！

そもそもまだ童貞の俺がなんでこれから処女を散らしそうになってるの？

いや・・・、もう考えるはやめよう。

……よし、この城を探検しよう。

大切だよ、探検。

どのくらい大切かっていうと、命と貞操の危機の次くらいかな……。

そのくらい切羽詰まってる感じだ。

目の前のにやけ顔の男の存在を今だけでも忘れるには、すぐさま探検に行く必要がある。

「じゃっ」

シュタッと手を挙げた涼はスタスタと扉の方向に歩いていく。

「どこに行くんだ？涼」

名前で呼ぶな！

俺が呼べって言ったんだけど、なんか嫌だ。

「散歩だよ、さ・ん・ぽ」

クレルの顔を見るとムカつくので振り向くこともなく歩き続ける。

コンッコンッ

涼が扉を開ける前に誰かによってその扉がノックされた。

第7話「俺から私」（後書き）

はい、お待たせして申し訳ないです。

あいまいだった世界観をしっかりとさせていたのと、他の作家さんの作品を読んでいました。

書くよりも読むほうが好きですね。

けど書くときはスラスラと書くのでポコポコ出せると思います。

第8話「王との謁見」

コンッコンッ

涼は扉まであと2mくらいで動きを止めた。

「入れ」

クレルが扉の外の者を促すと、失礼しますと言って金髪の騎士甲冑を着た男が入って来た。

男は涼を敵視するような眼で一瞥すると興味をなくしたかのようにクレルの近くまで歩いていき跪いた。

「王が呼びです。その人間も一緒に連れて来いとのことですよ」

クレルは最初やれやれというように頷きかけて、あとの言葉を聞き、顔を歪ませて涼のことを見る。

は？俺も？

王さまって何さ？

行きたくないからね。

と、顔に書いてあるほど、涼は如実に嫌悪を浮かべる。

クレルは難しい顔をして何か考えながら立ち上がり、扉に向かう。

「涼、着いてこい」

いやだ。

とは言えないんだよね。

「・・・分かったよ」

渋々とクレルの後に付いて扉から廊下に出た。

俺は今、廊下を歩いている。

思ったよりも小綺麗な通路を歩き、下に向かって階段を下っていく。

そして、もちろん今は巫女服に換装してある。

あんなドレスなんて着たくないからな。

クレルは巫女服に変わった俺を特に何も言わずに、さっきから黙々と歩き続けていた。

魔力が戻った俺は、さっきとは違ってしっかりとクレルに着いてい

くことができる。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

なんか魔力が身体に満ちてきた。

不思議に思い小走りになってクレルの横に並び、顔を見上げる。

それに気がついたクレルは前を見据えたまま、こちらの聞きたいことを察知して説明してくれる。

「涼、お前の魔力を8割ほど戻してやつただけだ」

涼は首をかしげながらクレルを見上げ続ける。

なんでだ？

さっき魔力を戻したのに、また返してくれるとか二度手間じゃん。

「なんで？」

「王が何をするか分からないからな」

「どういうことだよ？」

今はいつの間にか長い直線の連絡通路のような場所を歩いていた。

石というわけではない、ただ白いだけの幅4 m高さ4 mほどの長方形の長い通路。

ところどころに設けられている1 m四方の窓からは眩しいくらいの太陽の光が入り込んでくる。

一体この城はどういったつくりなのか気になるのだが、クレルの歩くのが速いものなにか緊張しているような雰囲気のため、ゆっくりと外を見ることができない。

ちらつと見た感じでは、眼下に城下街が見えて、その周囲を城壁が取り囲んでいた。

遠くの同じ目線の高さにはこっちと同じような連絡通路が左の窓、右の窓から見える。

これ以上みてもよくわからないため、クレルとの会話に集中することにした。

「王は気分の変動が激しくてな、以前王の機嫌を損ねたやつが一瞬で灰になった。そして、たとえ気分を損ねることが無くても、楽しそうだからという理由で何人も俺の部下や、城に訪問してきた客人が消されている。気休めにしかないだろうが、何も対策を立てないよりかはマシだな」

「なるほど……ね」

なんか理屈が通じなさそうで、会いたくないんですけど……。

「けど、いいのか？俺……が……、私が王を攻撃するかもしれないぞ？」

「はっ、無理だな。王は俺ですら太刀打ちできないほど強い方だ、俺に力を抑えられている上に、俺よりも僅かだが弱い涼が敵うはずがない。対峙すれば嫌でもわかるさ、けど……そうだな、もしも涼が王を攻撃するなら俺が全力で止めるつもりだし、また、その腕輪で魔力を0まで封じてもいい、どっちにしろ無駄なことはしないほうが身のためだな」

「へーそんな強いんだ」

「単純に魔力量だけ見ても俺や涼の3倍以上だからな」

「ふーん」

「……そういえばさ」

「なんだ？」

「わ……私の身体を直したのとか、き……着替えさせたのって誰？まさかクレルじゃないだろうな、もしそうならムツツリと呼ぶぞ」

「何だムツツリとは？まあいいか……涼の身体を直したのは俺の部下の一人のサイールだな、あいつの治癒の能力は頭さえ無事なら

完全再生が可能というほど高い、涼の場合はなかなか大けがだったからな、治ってすぐなら痛みを多少感じたかもしれないが今はそうでもないじゃいか？」

確かに目が覚めた時は多少痛かったけど、今はもう鈍痛すらない。

「あと、着替えさせたのは俺の部屋の侍女だ。俺は女の着るものなど着せ方が分からん」

なるほど、それはそうだ、クレルの性格では着せるなんて甲斐甲斐しい真似するわけがない。

むしろ、あのドレスとかを脱がす、というか破くほうが似合っている気がする。

そんなことを考えているうちに、長い連絡通路は歩き終わり、城の中を歩いていた。

そして、それ以上の会話をすることなく俺はいつの間にか、巨大な扉の前にクレルと一緒に立っていた。

「入るぞ」

そう言って扉が開き、王の間に入っていく。

そこは陰気な場所だった。来る途中の連絡通路なんかは「ここは光りの城の廊下です」と言われれば信じてしまえるほどに白く、暖かだったのに、この場所は魔王の居場所に本当にあっているとしか言えないくらい、………らしかった。

毒々しいほどに赤い絨毯を踏みしめて王の元へと歩いていく。

この王の間には正面の玉座に王と思われる人物が座っている以外誰も存在していなかった。

黒い髪に赤い瞳、赤い鎧のように見えるが、よく見ると鎧のように見える洋服を着こんでいるようだ、動きやすさを重視したような衣装。

ひじかけに頬杖をついてめんどくさそうにこちらを見下ろしている。

そして何よりも驚いたのはかなりの美女だということだ、黒髪は背で見えないが腰辺りまで長いように見える。

そして、王の前に立ちクレルが跪く。

涼も一緒にぎこちなくではあるが跪いた。

「グラニ王、青婪軍將軍バストマ・クレル、人間界侵攻より帰還いたしました。この進軍により海上の小島のいくつかを占領、人間は

殲滅完了しました。しかし、今回使役した魔獣はおよそ全滅いたしました。……」

クレルの言っていることは気になるが涼はそれどころではなかった。

何なんだあいつ……。。

性別にも驚いたが、なによりも王から発せられるプレッシャー圧力が尋常ではない。

今は抑えられているようだがそれでも決して近寄りたくない雰囲気
を醸し出していた。

強いということもあるのだろうが、それにもまして禍々しさがあふ
れだしている。

美女の魅力というか、この女がかなり怖い、……。存在がやばい。

俺の世界で昔にいたルイという王さまの嫁であるマリーさんとか、
金髪の双子の姉が歌う『悪の……』シリーズの王女とかを実際に
目撃した気分だ。

速くこの場所から離れたいのが本音だ……。。

と、色々と考えていたらどうやら名前を呼ばれたらしいので顔をあ
げて王を見る。

「お前はクレルの嫁らしいな」

「・・・・・・・・はい」

不本意だけども・・・・・・・・。

「ふむ、人間のくせにクレルと同等の魔力とはなかなかやるのお・
・。そうだ！人間、貴様の魔力が本当にクレルと同等かどうか確か
めてみようではないか」

隣でクレルが焦ったような雰囲気醸し出している。

そんなことには気が付かず、涼は確かめるって何？

と、首をかしげていた。

「キスしろ」

・・・・・・・・え？

最近思考停止になることが多い気がする。

平穩？なにそれ？

的に、俺の頭の中は常にミキサが入っているかのように、ぐっしやぐしやだった。

「・・・キ・・・ス？」

「そうじゃ、なに簡単なことだ。貴様とクレルがキスをする、同程度の魔力なら生き残る。力の差があるのなら貴様が弾けて死ぬ。ただそれだけのことじゃ」

「王！しかし、まだ時期ではありません。涼を俺の魔力にこれからゆっくりと馴らしていかなければ・・・」

「黙れ。やれといったらやるのじゃ、これは命令じゃぞ。それともクレル、貴様は私の言うことが聞けぬと言うのか？」

クレルが反論しようとするが、ここで反論すれば気まぐれな王のとだ、クレルを殺すことだってあり得る。

苦虫をかみつぶしたような表情で、しかし決して王には表情を見られないように立ち上がったクレルは、すぐ後ろにいる涼に向き直り一歩近づいた。

クレルがこつちを向いた。

とても嫌そう？というよりは何かに耐えているような表情でこつち

に近づいてきた。

いまだ混乱中の涼はただクレルを見上げるだけで、跪いたまま微動だにできなかった。

目の前にクレルがいる。

いつの間にしゃがんだのだろうか？

その目線の位置は涼と同じ高さになっていた。

ゆっくりと。

まるでスローモーションでも見ているかのようにクレルの手が俺の頬に触れた。

そのままあごに滑らせた手でぐいと上を向かされる。

クレルの紫色の瞳が近づいてくる。

まるで俺の身体じゃないかのように心臓が早鐘を打ち、耳にはドクンドクンドクンと心音が聞こえない。

なんでこんなにも緊張しているのか混乱しきった今の頭では到底理解できない。

「涼・・・、死ぬなよ」

「え・・・、な・・・に！？ふうぐ・・・」

何かを聞こうとした、しかしその唇は言葉を紡ぐことなくクレルの唇で塞がれる。

「・・・ふ・・・んう・・・、あう・・・・・・んんうう・・・」

遠慮なんてしてこない本気のデープキス。

最初から舌を口内にねじ込まれて、本能的に押し出そうと舌で押し返そうとするが、クレルは巧みにその舌を絡め捕り快楽へと導いていく。

ドクンッ！！

初めてのキスに酔いしれていたのは一瞬だったのか、数秒だったのか、数分だったのか、涼には判断できなかったが、ソレは唐突に訪れた。

クレルとキスをする。

おそらくはその瞬間だったのだろう。

クレルの魔力という名の熱く黒い何かが身体を駆け巡るのが分かる。喉を通り、胃や腸といった消化器官無視してクレルの魔力は涼の下腹部に真っ直ぐに下降した。

そして、そこから身体を侵食するかのよう徐々に手足へと染みわたっていく。

じれったい様な焦燥感を感じるが、そんなことを涼が考えることができるはずがないほどに身体はクレルの魔力によって蹂躪されているため、思考できない。

その熱はただ涼の身体を満たすだけでなく、媚薬のような興奮作用を含み、強烈な熱となって涼の思考を染め上げていった。

な・・・なに・・・これ・・・。

身体が熱い。

足に力が入らない・・・。

なんか・・・ふわふ・・・わ・・・す・・・る・・・。

そこで涼は意識を手放した。

「ほう・・・、生き残ったか。しかも、初めて受け入れたにもかかわらず身体に微細な傷もないとはのく、クレル・・・ずいぶん相性のいい女を見つけたようだの」

そう言つて王は口角を上げて心底楽しそうにクレルの腕の中で寝息をたてている銀髪の少女を見つめる。

「王・・・、涼を休ませたいのですがよろしいでしょうか」

クレルは自身の魔力を受け入れたことで頬を赤く染めて規則正しくすう、すうと寝ている少女をしっかりと腕に抱いて退室の許可を求める。

「ああ、よいぞ。ゆっくりと休ませるがいい」

「ありがとうございます」

涼をお姫様だっこした状態で恭しく礼をして、クレルは自身の部屋へと戻つていった。

クレルが王間から出て行つたあと・・・。

ラデイスオン国王である、グラニ・ラ・プルミエは玉座から立ち上がり、自室へと歩き出す。

「くつくつくつく、あの小僧と同じ魔力の娘か・・・、人間界殲滅よりは少しは暇がつぶせるかもしれんの」

不吉な言葉を残して。

第8話「王との謁見」(後書き)

お待たせしました。

遅くなり申し訳ないです。

第9話「クレルの視点」

涼が攫われる数時間前……

「クレル様、待ってください！私も行きます！ぜひお供させてください」

青髪で丸顔をした子猫のような雰囲気少女がクレルの後ろをアヒルの子のように歩いて歩いていた。

クレルはめんどくさそうに眉をしかめながらも歩くことをやめなくて話しかけた。

「断る。一応、王に進言して侵攻と偵察という名目で人間界に行くが、今回の目的は完全に私用だ、連れていくことはできない。命令だ」

少女はまだ何か言いたさそうにしていたが、俯いてぶつぶつといていたがついていくこと自体をやめることはしなかった。

王都から少し離れた施設の中にクレルと少女……サイールは立っていた。

施設といっても外縁を城壁に囲まれたかなり巨大なとりでといった
もいい建造物だった。

その一室でクレルの前でかしずいている子供のような小柄の人物が
いた、子供のような体格でもその顔はひどく歪んでおり、醜悪とい
つてもいいかもしれない。

「ゼル、出撃する。数は低級250に中級20程でいい、すぐ用意
できるか？」

「もちろんでございます、クレル様。5分未満で用意いたします」

「そうか、いつも仕事が早いな。門ゲートに先に行っているから後から来
い」

「かしこまりました」

クレルは踵を返して施設中央の中庭に佇んでいる門ゲートに向かった。

・・・もちろん青髪の少女、サイールが付いて行った。

「これか・・・」

「はい、そうでございます」

クレルの手には様々な色と大きさを持つ球が袋に入って270個渡されていた。

「必要ないと存じますが、規則ですのでご説明させていただきます。その球が魔物の卵のようなものになります。魔力を込めることで孵化いたします。魔物どもは魔力を与えられたものの命令を従順に従います。以上になりますが何かご質問はございますでしょうか？」

「ないな・・・、では行ってくるか」

「『行つてらっしゃいませ』」

ゲート
門の周りの護衛やサイールたちが声を合わせて送り出す。

人間界に繋がる100m程の高さの塔、その塔には場所や高さ関係なく20か所の光の穴のような、トンネルがまばゆく光っている。

クレルは浮かび上がると、そのひとつに進んでいき軽く手を挙げて後ろの声にこたえた後に光りの穴に入って行った。

太平洋沖の塔の中にクレルは来ていた。

「將軍！わざわざこんな場所の拠点に来ていただきありがとうございます！」

「気にするな、私用だ。お前らは気にしなくていい」

塔に常駐する兵に一言声をかける。

もちろん余計な気をまわして、俺の歓迎などに集まるなど釘をさしておくことは忘れない。

しかし・・・、と何かを言おうとした兵を無視してクレルは飛び上がり一気に加速、姿が見えなくなった。

確かそこそこの大きさの島だという報告だったな・・・

クレルは先日聞いた情報を思い出した。

第11ゲートから西に向かった島国の魔法使いの話。

装束は白、髪も白、武器も白、白い色が好きなのかというほどの魔法の使い手であり、我が青焚軍せいらんぐんの幹部の1人と1200の魔物を、ほぼ1人で殲滅したらしいとの情報だった。

生き残った部下の話によるとだが・・・

しかも、女であるという。

悪い冗談だとも思ったが、人間界には確かに私にも匹敵する魔法使いがいると聞いたことがあるからそいつと戦ったのだろう。

数は少ないらしいが・・・、それに当たるとは運が悪かったとしか言いようがない。

そして、興味を持ったクレルは実力を確かめるために、先ほど魔力を込めて生み出した魔物たちと共に例の島国に向かっていった。

しかし・・・

いくら見ても不思議でならない。

ビー玉程度の大きさの球に魔力を込めただけで、なんで5mを超えるような魔物が生まれるのか？

一気に魔力を込めたため肉が膨れ上がるかのように増殖する魔物たち。

クレルは知らないが満員電車から人が溢れたすのを上下左右で行うところという現象になるかもしれない。

その肉塊に潰されないようにすぐに距離をとって見ていたクレルは、魔物たちの体制が整ったところで移動を開始していた。

そろそろ島国の魔法使いに探知されるだろうという距離・・・

クレルは自信を紫のボールで包み込み気配を完全に消して魔物たちの背後から追走する。

魔物たちは「敵と出会ったら殺せ、それまで止まるな」と命令してあるので問題はない。

そして、俺はその魔法使いと出会った。

衝撃的だった。

その容姿もさることながら、戦い方の無駄のなさに加えた美しいと呼べるほどの戦闘技術、時折聞こえる声は耳朵を刺激して何度も頭の中を反芻する。

生まれて初めての感情だった。

欲しい……

あの女が欲しい……

俺は本気でそう思った。

この女が人間だからとか、部下を殺した魔法使いだからとか、そんなものはどうでもよかった。

ただ純粹に、愚直に、欲望に忠実に、どんな手を使っても手に入れ

て見せる。

クレルにそう感じさせた。

しかし、いくらなんでもこの場でとらえることは容易くはないと感じた。

300近い魔物を瞬殺といってもいい速さで殲滅したのだ。

全力を見せてはいなかったのだからだったが、俺よりも少し弱いくらいか？

ここで捕獲しようと動けば確実に戦闘になる。

勝てなくもないが長引くことは必須だろう。

ならば……

今の不可視の状態ではいけないのだ。

このまま様子を見て隙を見て捕えればいい。

1人そう考えると、帰還を始めた白い女を追って追いついた、自身の魔力を与えた魔物の残骸を一顧だにすることなく……

その時は案外早く訪れた。

人間が白い女に何かを打ち込んだのだ、女は打ち込んできた人間を始末はしなかったようだが拘束してなんとか意識を保とうとしている。

しかし、時間がたつほどに白い女の魔力が乱れてきた。

このままではいずれ意識を失うかもしれない、そしたら連れ去ればいい意識を失っても高位の魔法使いは自衛の魔法を使っていることが多いので、多少痛めつけるかもしれないがあとで直せばいいので問題ないだろう。

と、そこまで考えていたら突然俺の左下の眼下の空間が割れて魔物が姿を現して白い女に攻撃を始めた。

俺の連れてきた奴ではないな、見た感じ上級か特級クラスの魔物のようだから逃げてきたのか怪我をしている。

まあ俺には関係ないが、白い女もよくやる……

あそこまで魔力が乱れていて、あんなに戦えるとはな……

ますます欲しくなった。

と思案していると殺されそうになっていた。

さすがに無理があつたか……

俺は不可視の魔法を解除。

完全に油断している魔物を一撃でミンチにした。

「ご苦労だつたな」

俺はここまで白い女を弱らせてくれた魔物に礼を言う、魔物自身はそんなつもりではなく殺す気だつたようだがな。

これ以上失血しないように紫のオーロラで応急措置をしてさらに固定化させる。

そして怯えながらこちらを見ている周りの人間どもを一瞥して飛び上がった。

ゲート
門への移動中に白い女が光り出して男になつた時はかなり驚いた。

なんとか女に戻す術式と、魔力封印などの術式を込めた腕輪型のオーロラを作ること成功したときは心底ほつとした。

あの時はかなり焦つた、男のこいつは好きになれそうになかつたからだ、さっきの男の姿の女のこととは忘れようと思つた。

俺は女を捕まえたのだから・・・

門を潜り城に帰還した後は医療魔法使いに女を預けて、完治したら俺の寝室に寝かせておくことを侍女に指示しておいた。

数日して・・・

隣の寝室で寝ていた女が起きる気配を感じて寝室へと足を運んだ。

キイイイ・・・

軋みを上げて扉が開く、最初はこんなに音はならなかったのだがあることが原因でこんなにうるさく鳴りだした。

そして、正面を見るとこちらを見つめながら困惑しつつも警戒した様子の少女の姿が目に入った。

数日間、寝ているときには布団に隠れて見えなかったがかなりかわいいドレスを着ていた、ドレスといっても寝巻に近いものではあるのだがそれでも、白い白銀の髪に金色の瞳が実に映えるドレスだった。

そんなことを考えながら白ずくめの少女に近づいていく。

「な．．．．なんだよ．．．」

俺が近づくことでさっきよりも警戒度を上げた様子だ。

「ほお、似合ってるじゃねえか」

感じたことを素直に口にしたのだが、女はみるみる態度が悪くなっていく。

「うるせー！俺の趣味じゃねえ！」

さっきと随分態度が違つことに驚きつつも苦笑する。

「ここどこだ！そしておめえは誰だ！！」

こんな小柄の少女に怒鳴られたところでなんとも思わない。

クレルは肩をすくめる。

まあ俺が攫ってきて言うのもアレだが、説明してやるか．．．．

注意も含めて。

「ここは魔界だ、お前らの住んでいる人間界とは次元の違う世界だ。そしてここは、王都ラディスオン帝国の城にある俺の私室だ。あと、「おめえ」ではなく、バストマ・クレルという名がある、クレルと呼べ」

「ここがどこかは分かった。で、なんで俺はここにいるんだ！」

「俺がさらってきた。人間界になかなか強い面白い女がいると聞いていたのでな、観察しに行ったわけだ。そしたら、あの程度の雑魚魔物に殺されかけていたからな、助けて連れてきたってわけだ」

助けたことにすれば恩も売れるし、言うことを聞きやすくなるだろう。

「……ありがとう。……一応命の恩人だから礼だけは言っておく、もう帰っていいか？」

帰すわけがない、お前はもう俺のものだ。

そして宣言する。

「それは無理だな、お前はこの俺の嫁になるのだから」

呆けた顔で俺の顔を凝視したままたっぷりと10秒は経っただろうか？

そこでやっと反応があった。

「は？」

短いものだったが……

「聞こえなかったのか？嫁になれと言ったのだ」

明らかに女は混乱した様子で……

「無理！」

「拒否権はない。命令だ」

「いや無理だから。意味分らないから！」

断ると思っていたがやはりか……

説明するのもめんどくさいが仕方がない、俺の嫁のためだ頑張るか・
・・・

そして、魔族の嫁事情の説明をして腕に付けたリングの説明もしてやる。

はつきり言って面倒くさかったが、女の反応が面白くて嫌ではなかった、むしろ話している途中で女は睨んでいるつもりだったらしいが、俺からしたら上目づかいで見つめているだけのような状況があり、激しく動揺したりもしたがなんとか目をそらすことで、その動揺は隠せただろうと思う。

そして一通り説明して最後通告してやる。

「分かったら嫁になれ。これはもう決定事項だ」

だが女は俺を無視して腕輪をはずそうとしている。

俺のオーロラ型の腕輪は空気のようなもので外すことはできないのだがな・・・・

いつまでやっているのか・・・・

これは、あの手を使わないと納得しなさそうだな、自分から俺のモノになってほしかったがいきなりはさすがに無理があるか・・・

クレルは溜息を吐いて手招きをする。

「とりあえずこっちに來い」

「断る！近づくな！」

「つたく・・・」

頑なな奴だ。

一瞬で女の後ろに回り込み肩に担ぎあげた。

悲鳴を上げながら何かしら喚いているが無視して部屋の外へと出た。

「は〜な〜せ〜よ〜！」

肩に担いだ状態で暴れられるとバランスが崩れて不規則な歩き方になる。

いいかげん煩わしくなってきたので黙らせることにしよう。

「うるせえ！」

パンツ！

思いつき尻を叩いた、多少手加減はしたがドレスの上からなのになかなか小気味のいい音がした。

「ひゃあっ！」

思ったよりもかわいい反応をする・・・

もう一度聞いてみたいな・・・

「はっはっはっは、かわいい声で鳴くじゃねか」

「痛っ！にやっ！ううう！ちょっ！もうっ！やめっ！」

そう言いながら何度もたたいていると「も・・・もう！あばれっ！ないっ！から・・・！」と泣き声で言ってくるので叩くのをやめる。

もつと聞きたかったんだがな・・・

そう思いながら、最後に釘をさしておくことは忘れない。

「最初からおとなしくしていればいいんだ」

そう言って干からびた昆布のようになってる女を担いだまま地下の牢屋を目指した。

牢屋の通路でどうでもいい会話をしながら人間が収監してある牢へと近づく。

そこには以前、部下が攫ってきた人間が20人ほど押し込められていた。

まったく、あいつが何を考えているのかは分からないが今は都合がいい、使わせてもらおうとするか・・・

「なんで、人間がいるんだ？これも嫁とかにするつもりか？」

「これは、お前のために用意した人質だ。俺の嫁にならなければこいつらを1人ずつ殺す。わかったか？」

俺は満面の笑みで女を見つめ返す、絶対に逃がさないという思いを込めて。

「そんなの卑怯だ！それに俺は男だって言っただろ！」

「そうか・・・、残念だ」

殺す気はない、ただ殺意は本物のモノを醸し出しながら、いつもなら一瞬で発動できる魔法を、時間をかけて練っていく。

それはまるで死へのカウントダウンのように・・・

女は今にも泣きそうな顔して絞り出すように叫ぶ。

「分かった！なるよ！なる、お前の嫁になるからその手を下せよ、
・・・な」

「そうか、それは良かった」

もつとその顔見ていたかったが、この暗い場所ではよく見えない、嫁になるという言葉は取ったのだ・・・、時間はいくらでもある。これから様々な顔を拝ませてもらおう、この俺の手で・・・

クレルはニヤニヤとしながら元来た道に戻り出した。

後ろに涼を連れて。

「・・・はあ・・・はあ、ところでさ・・・、お前はいつから・・・俺に目をつけたんだ？」

一生懸命に俺の歩幅についてくる女が何か言ってきているが、それよりも気になっていることがあった。

「おい・・・」

呼びかけて立ち止まると、後ろから走ってきた女が俺にぶつかった。

「うわっと・・・、なんだよ！」

そっぴいながら俺の腹をなでている、いったい何をしたいのかが分からない。

「何をしている・・・。いや、どうでもいい・・・、貴様はこれから『俺』と言うことを禁ずる。なんか気に入らん！あと俺のことはクレルと呼べと言ったはずだ」

「お前のことをクレルと呼ぶのは別に問題ない・・・。だけど、俺と言うのを否定されるは嫌だ。俺はあくまで男だ！」

「前に言っただけだ、貴様に拒否権は無いと、『俺』ではなく『私』と言え、さもなければ人質を殺す。わかったな」

これでいい。

女なのに男のような口調がどうもしっくりこなかったのだが、これだけ脅しておけば大丈夫だろう。

そう言ってクレルは歩きだした。

と・・・、後ろでぶつぶつという声が聞こえた。

「何か言ったか？」

そう言っとしどろもどろになりながらも女がなんとか取り繕っている、絶対に何かを隠しているだろう・・・

「え・・・？あゝ、その、あれだ・・・、そう・・・名前！俺のな・・・じゃなくて、あつと・・・、わ・・・わた・・・わたしの名前は涼だ！貴様じゃない！おま・・・、クレルも、お・・・わたしのことは涼って呼べ」

そのほほを上気させながら話している姿を見て、勝手に手が女・・・いや、涼の頭の上に置かれた、が・・・ただ撫でるはつまらないので思いつき押し込むようにぐりぐりと撫でつける。

「それもそうだな、これから名前で呼ぶでしょう……涼」

「いいかげんにやめろ！」

いつまでも続けていたかったが手を払われた、ささやかだが俺の希望は叶った、女の名前を知ることでもできた。

クレルは上機嫌で再び歩き出したのだった。

部屋に戻ってからの女……涼はさっきまで不機嫌だったとは思えないほどに楽しそうに部屋を物色している。

こんな平凡な部屋の何が面白いのか……

だけど、なるほど……こんな一面もあるのか。

そんなことを考えながら、クレルの部屋付きの侍女であるリレイに紅茶を入れてもらって椅子に座ってゆっくりと飲む。

紅茶を受け取るときリレイがニヤニヤしていたのが気になったが、あえて無視しよう、こいつは絶対に碌なこと考えていない。

のんびりしていると涼が近づいてくる。

「……これ、はずせ」

ある程度予想していたことはある。

こんな敵地のど真ん中で無防備な状態など不安なのだろう。

もともと魔力はある程度戻してやるつもりだったので吝か^{やたら}ではないがな。

そして、いろいろと駄々をこねた（魔力量・ドレスの件・寝室など）が全て納得させたら、あきらかに不機嫌だという態度で行こうとする。

「どこに行くんだ？ 涼」

「散歩だよ、さ・ん・ぽ」

全く……、しばらくは俺と一緒にしか行動はさせるつもりはないのだが……

後で言うておくか、誰か来たようだしな。

コンッコンッ

涼が扉をあける前に誰かによってその扉がノックされた。

「入れ」

金髪の騎士甲冑を着た男が入って来た、こいつは王の近衛だ。

ということは今回の報告だろう・・・

「王がお呼びです。その人間も一緒に連れて来いとのことですよ」

最悪だ・・・

いつかはばれると思ったが早すぎる。

王のことだ、何をするかが全く予想ができない・・・

だが、行くしかないか・・・

「涼、着いてこい」

そう言う涼は「……分かったよ」と言いながら、明らかに渋々と着いてきた。

王の間の扉の前。

涼に魔力を全て戻してやって、どうでもいい雑談をしているうちに着いてしまった。

気合を入れなければならない。

せめて、王が涼を殺すことがないように守らなければ……

「入るぞ」

そう決意しながらクレルは王の間へと踏み込んだ。

今の状況は運が良かったのか、悪かったのか……

ある意味ではよかったかもしれない。

涼が王の機嫌を損ねるといことがなかったため殺されることがなかったからだ。

しかし、これから死ぬかもしれない……

この俺の手によって。

魔族のキスは命懸けだ、種を残すという行為である性交渉よりかは生存率が高いが、それでも女の魔族は多くのリスクを背負っている。涼は人間だが体の構造は魔族とほぼ変わらないことから、おそらく我々魔族と同じような現象が起こるだろうことが推測できる。

つまり、女の魔族はより高位の男の魔族よりも一定以上力が下の場合死ぬ。

少しずつ慣らすつもりだった……

人間が相手でもあるし、涼は俺よりも若干だが魔力量などが下回る。

耐えられる程度の誤差ではあったが不安要素が多すぎるのだ、ようやく手に入れた俺の伴侶となれる女を死なせたくはなかった。

だが、無理かもしれない。

涼が耐えられることを祈るのみだ。

俺は……涼とキスをしなければならない、王の命令で……半端なことをすれば王が機嫌を損ねることは今までの経験上嫌というほど熟知している。

王が満足するまでキスを続ける。

それまで死なないことを祈るのみだった。

俯いている涼に近づく。

俺の葛藤は一瞬。

王の命令ならば聞かなければならない、意見は許されてはいるが拒否しようものなら將軍職にいる俺でも殺されるからだ、結局自分が大事というわけだな……

目がかすかに潤んで、不安と恐怖の入り混じった表情の涼の顎を持ちあげる。

「涼……、死ぬなよ」

俺は声をかけた瞬間に我に返ったかのように困惑の表情を浮かべる涼の瑞々しい唇を奪った。

「え・・・、な・・・に！？ふうぐ・・・」

刹那の抵抗も許さずに右手で顎を押さえて、左手で腰を引き寄せる。始めは驚きからか抵抗らしき動きをしていたが、舌を口内にねじ込み蹂躪するかのように涼の舌を絡め捕り、味わっていく。

「・・・ふ・・・んう・・・、あう・・・んんうう・・・」

唇を奪った瞬間から俺の魔力が涼に流れていくのを感じる、時間にしたら1分にも満たなかったであろう時間。

その間に俺の魔力が涼の体を駆け巡り侵していくのがわかった。

そして・・・、涼は死ぬことなく、俺のうでの中で頬を上気させて荒い呼吸を繰り返しながらも気絶していた。

生きていた！

死ななかったという喜びもあったが、それにも増して俺との相性の良さに歓喜さえ覚える。

今、腕の中で寝ている少女が愛おしい。

「ほう・・・、生き残ったか。しかも、初めて受け入れたにもかかわらず身体に微細な傷もないとは、クレル・・・ずいぶん相性のいい女を見つけたようだの」

そう言つて王は口角を上げて心底楽しそうにクレルの腕の中で寝息をたてている銀髪の少女を見つめる。

「王・・・、涼を休ませたいのですがよろしいでしょうか」

クレルは自身の魔力を受け入れたことで、今は規則正しくすうすうと寝ている少女をしっかりと腕に抱いて退室の許可を求める。

「ああ、よいぞ。ゆっくりと休ませるがいい」

「ありがとうございます」

涼をお姫様だっこした状態で恭しく礼をして、クレルは自身の部屋へと戻つていった。

クレルの寝室。

ベッドに寝かした涼を見ながらクレルは笑みを浮かべる、それは実に楽しそうに・・・

「これから楽しみだな・・・、涼」

その言葉を涼が聞けば反論の一つでもしただろうが、寝ている状態の涼にそのセリフが聞こえるはずもなく。

日は既に地平線に沈む時間だった。

第9話「クレルの視点」（後書き）

お待たせいたしました。

別に書きたくなかったというわけではないのですが、いろいろありまして……

年末年始、インフルエンザ、定期テスト、とどめにパソコンが諸事情により壊れて使えなくなるなど、まあそんなことがあつて書く気が減退していたりしました。

これからの更新は大体1カ月おきくらいになりそうな感じです。

ご理解のほどよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814p/>

おれが魔族の嫁に！？

2011年7月24日14時12分発行